

---

## 2歳で2語文がない子どもの分析的検討

—乳幼児健康診査とフォローアップ相談結果から—

山根 律子  
金野 久留美

---

### 1. 目的

知的発達の障害や自閉症の診断基準には該当しないが、言語の理解や言語を用いたコミュニケーションに継続する弱さを持ち、学習や社会活動への参加にハンディキャップを示す状態がある。聞こえなどの感覚器の障害や明確な器質的障害がなく、環境上の原因によるものでもない場合、このような状態を特異的言語障害 (specific language impairment, SLI) といっている。言語理解や言語によるコミュニケーションの弱さは、学齢期になると教師の説明の理解や文章の読解、友人間での会話への参加など学校生活上の障壁となりやすいが、幼児期には日常生活での簡単な会話が成立すればあまり目立たないため、これまであまり積極的な対応がとられてこなかった。

一方、障害の早期発見・早期対応を目的とする乳幼児健診では、「ことばの遅れ」のスクリーニングが定着し、1歳6ヶ月児健診で多くの「ことばの遅れ」に該当する子どもが抽出されている。この「ことばの遅れ」を示す子どものスクリーニングは、早期に知的障害や自閉症などの発達障害を発見する上では有効であるが、明確な発達障害に該当しない子どもでは、日常生活上のことばによるやりとりが可能になればことばは「追いついた」とみなされ、特異的言語障害の発見にはあまり結びついていない。近年の研究では、幼児期にことばの遅れが追いついたように見える場合でも、学齢期になって読み書きに困難さが生じたり、学齢期初期には差が無くても、8歳～9歳、13歳でフォローすると差があったとする指摘 (Rescorla, L., 2000) がなされたりするなど、見かけ上「追いついた」とされる状態であってもその一部は学齢以降に困難さを残すことが明らかになってきた (Stothard, Snowling, Bishop, Chipchase, Band, and Kaplan, 1998)。

健診で「ことばの遅れ」として抽出された子どものうち、将来にわたり言語面での弱さが継続すると予想されるリスク児を特定することができれば、健診を生かして幼児期から学齢まで継続する発達支援を提供することができる。しかし、「ことばの遅れ」を示す子どものうち、どのような子どもが特異的言語障害のリスクがあるのかについては未だ情報が少なく、将来のリスクのある状態像を特定することができていない。「ことばの遅れ」として一定の基準で抽出された子どもにどのような状態の子どもが含まれ、スクリーニング時のどのような状態が後の特異的言語障害リスクの指標になるのかについての資料を収集することが必要と考えられる。

Rescorla (1989) は、幼児期の言語発達の遅れを親への調査により発見する指標として、「Delay 3」という「2歳で複数の語の連鎖がないか、単語が50以下」の基準を設け、言語発達障害のリスクがある子どもを抽出する基準としてこの基準が妥当であることを検証した (Rescorla and Alley, 2001)。語連鎖の有無はわかりやすい指標であり、健診の場で養育者に確認する項目としては使用しやすい。そこで本研究では、「2語文がない」として抽出された子どもの状態とその後の経過について整理し、明確な発達障害と特定されなかった事例を中心に「ことばの遅れ」を示した子どもの示す発達特徴に関する資料を得る。

## 2. 方法

### (1) 対象

乳幼児健康診査または未受診者訪問等により2歳0ヶ月時に「2語文」がなく、その後発達上のリスクがある母子を対象として参加を勧奨するフォローアップ教室に参加した子どもで、現在3歳を越えている子ども66名 (平成3年10月生まれ～平成9年11月生まれ)。フォローアップ教室への参加期間は任意であり、子どもにより異なる。

### (2) 手続き

乳幼児健康診査 (以下健診とする) の記録、フォローアップ教室時に実施した個別発達相談の記録と発達検査等の検査結果から以下の情報を抽出する。

#### ①乳幼児健診の記録

健診時に養育者から聞き取る項目のうち、①1歳6ヶ月児健康診査時 (1歳6ヶ月) の「3つ以上 (後半時期の健診受診児については4つ以上) の意味のあることばの使用の有無」②3歳児健康診査 (3歳0ヶ月) 時の「ことばについて気になることの有無」とその内容について、結果を健診票をもとに抽出した。「ことばについての気になること」に多動や対人コミュニケーション面について指摘されている場合には、ことばの遅れと行動上の特徴との関連も検討するため、これらも含めた。

さらに、1歳6ヶ月児健診、2歳児健診 (2歳0ヶ月) 時に指さしの使用状況について確認されている子どもについては、指さしの使用の有無を取り上げた。さらに、健診時の質問項目に加えて指差しを用いる状況について記録された対象児についてはその結果を調べた。指差しを用いる状況についての確認は、「何か欲しい時に指さして伝えますか」 (以下「要求の指さし」とする) 「何かを見つけた時に指さして伝えようとしていますか」 (以下「叙述の指さし」とする) の質問を養育者に行って答えを求め、その場で子どもに絵本を提示し「ブーブどれ？」などいくつかの単語を聞いて指さして教えるか (以下「応答の指さし」とする) について確認した。

#### ②個別発達相談時の記録

フォローアップ教室で養育者の同意が得られた場合に、発達検査を含めて約1時間筆者らが個別に養育者から話を聞き、行動を観察した。この記録から言語発達に見られた特徴と、対人関係や多動性などの行動面に見られた特徴、興味や学習の偏りなどの発達特性の有無についての情報を抽

出した。

### ③発達検査等の結果

保護者の同意のもとに新版K式発達検査，田中ビネー式知能検査，WPPSI知能検査，津守式乳幼児精神発達質問紙，デンバー式発達スクリーニング検査のいずれかの検査を実施した児については，その結果を「遅れ」「境界」「遅れなし」に区分した。ここでは操作的に新版K式発達検査，田中ビネー式知能検査，WPPSI知能検査，津守式乳幼児精神発達質問紙全体でのDQまたはIQが69以下を「遅れ」，70～85を「境界」，86以上を「遅れなし」とし，デンバー式発達スクリーニング検査は，言語領域の「境界」「遅れ」の判定によった。

### ④就学指導の有無とその内容

学齢時における発達障害の有無についての指標として，小学校に入学している児童については，就学時の就学指導委員会による就学指導の有無と判断を確認した。就学指導時に適当とされた場合と実際の就学の場とは必ずしも一致していない。

## 3. 結果

### (1) 対象児の属性

#### ①男女比

男児52名女児14名で，男児が全体の79%を占める。

#### ②周産期の状況と生育歴

66名中在胎36週未満34週以上での出生が4名，2500g未満2200g以上での出生が6名含まれていた。切迫流産が2名，早期破水が2名あり，帝王切開による出産5名，吸引分娩3名であった。出生後保育器に入ったものが2名，光線療法を受けたものが6名含まれていた。

1歳6ヶ月までの既往歴では，熱性痙攣3名，水頭症疑1名，代謝異常1名，中耳炎1名が見られた。いずれも肢体不自由はなく，上記以外の発達に影響が予想される医学的な問題は指摘されていない。

### (2) 乳幼児健診時の状況

#### ①1歳6ヶ月時点での3語（または4語）以上の有意味語の有無（表1）

2歳時に2語文がない子どものうち，1歳6ヶ月児健診で3語または4語以上の意味のあること

表1 1歳6ヶ月時の3または4語以上の有意味語の有無

	あり	なし	合計
3語以上	13 (48%)	14 (52%)	27
4語以上	17 (55%)	14 (45%)	31
合計	30 (52%)	28 (48%)	58

人 (%)

ばが見られていた児は約半数であり、半数は見られていなかった。

② 2歳での10語以上の表出語彙の有無 (表2)

2歳で10語以上の有意味語があるかどうかの確認がなされた40人についてみると、65%は2語文がないだけでなく、10語の表出語彙がなかった。

表2 2歳での10語以上の表出語彙の有無

あり	14 (35%)
なし	26 (65%)

(人 (%) ; n=40)

1歳6ヶ月で3語または4語があった場合に、2歳時点で10語があるかどうかをみると (n=35)、1歳6ヶ月で3語または4語が「あり」、2歳で10語が「あり」の児が8人 (23%)、1歳6ヶ月には「あり」2歳で「なし」が5人 (14%)、1歳6ヶ月で「なし」で2歳で「あり」が5人 (14%)、1歳6ヶ月で「なし」2歳で「なし」が17人 (49%) であった。

③ 3歳時の「ことばについて気になること」の有無とその内容

3歳児健診を受けた60人についてみると、3歳の段階で63%が気になることがあった。「あり」と答えた人の「気になること」の内容は大きく3つに分けられ、25人 (66%) はことばが少ない、ことばが遅い、2語文がないなど、言語発達の遅れについて気にしており、14人 (37%) は発音がはっきりしない、聞き取りにくいなど発音について、10人 (26%) は多動、落ち着きがない、視線が合わないなど行動上の問題についてあげていた。行動上の問題をあげた内の7人は合わせて言語発達の遅れをあげ、3人はことばについては気にしていなかった。他に、「言ったことが伝わらない」が1人あった。

④ 1歳6ヶ月時と2歳時の指さしの有無

1歳6ヶ月時に指さしの有無を確認した25人では、このうちの12人 (48%) は指さしが見られており、13名 (52%) は指さしが見られていないか伝達に使っていなかった。2歳時に指さしの使用の有無を確認した25人では、23人 (92%) が指さしを使用しており、2人 (8%) が使用していなかった。2歳時には2語文がない子どもでは1歳6ヶ月で指差しを使用していない子どもの比率が高いが、2歳時点では使用している子どもの割合は高かった。

⑤ 指さしの機能別使用状況

指差しが「ある」場合に、要求、叙述、応答の3つの指さし機能の有無について確認した対象児

表3 指さしの機能別使用状況

	全体	要求	叙述	応答
1歳6ヶ月児	5人	5人	3人	1人
2歳児	19人	18人	14人	8人

は1歳6ヶ月児健診時で5人、2歳児健診時19人であり、指さしの機能別にみると1歳6ヶ月児も2歳児も、指さしを使用しているも応答の指さしを使用していない子どもが多かった。

(3) 発達検査等の結果

66名中42名がいずれかの発達検査を少なくとも1回受けた。対象児別の結果を図1に示す。2歳代で検査をした子ども19人では、「遅れなし」が7人、「境界」が6人、「遅れ」が6人であり、3歳から4歳になるまでに検査を実施した17人では、「遅れなし」が4人、「境界」が4人、「遅れ」が9人であった。従って4歳までに受けた初回結果からは、「遅れなし」が30%、「境界」が28%、「遅

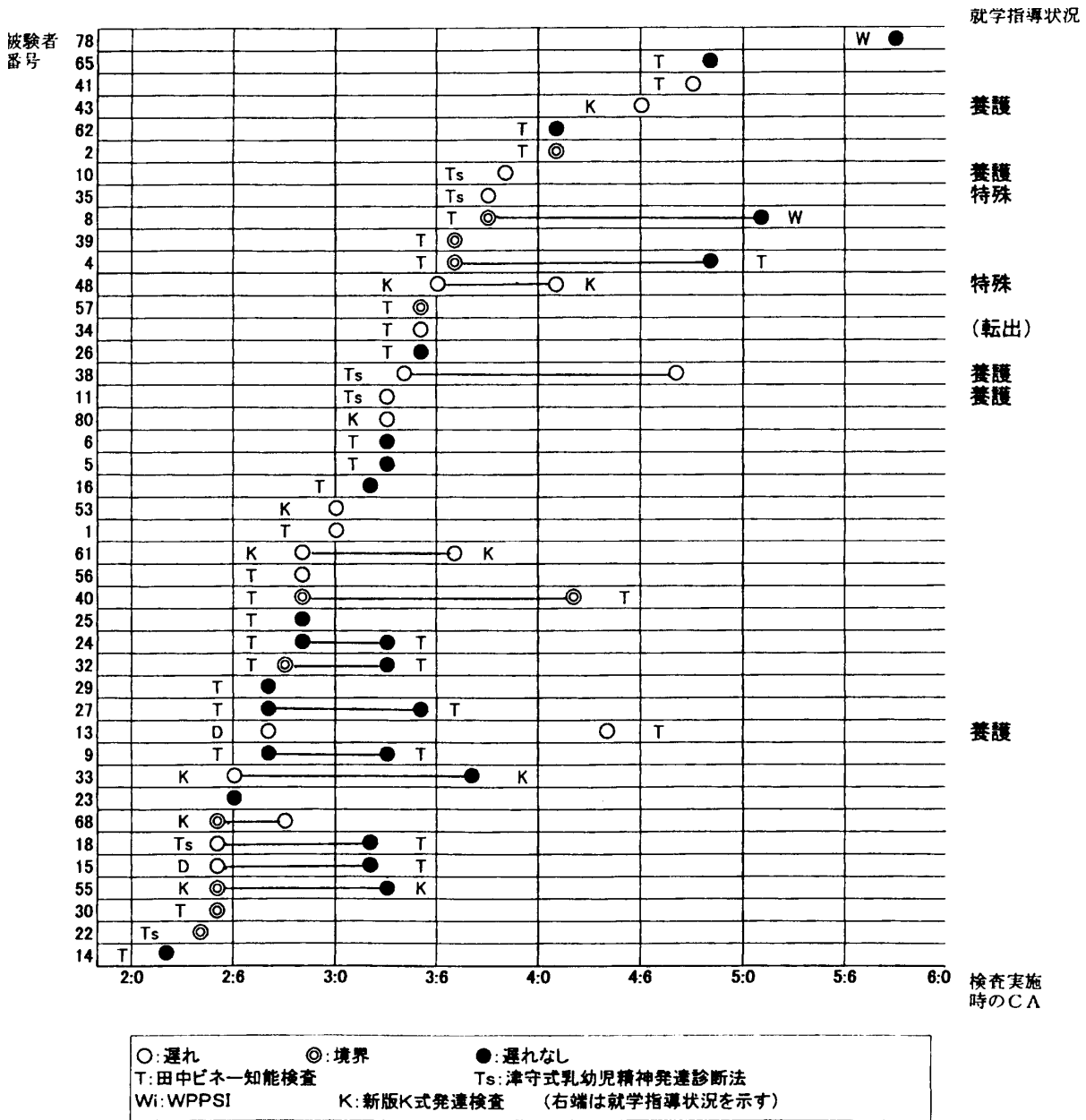


図1 2歳時に2語文の使用がみられなかった児の発達・知能検査結果 (n=42)

れ」が42%となり、半数弱に「遅れ」がみられた。

複数回検査を実施している15人についてみると、初回検査で「遅れ」であり、後に「遅れなし」になった子どもは3人、「境界」になった子どもはなし、「遅れ」のままであった子どもが3人いた。初回が「境界」で、後に「遅れなし」になった子どもが3人、「境界」のままが1人、「遅れ」になった子どもが1人いた。「遅れ」であった子どもが「遅れなし」に移行した3名はいずれも2歳代で「遅れ」であったが、4歳までに「遅れなし」になった。4歳までに「境界」であった子どもは「遅れなし」に移行する例が4人あり、うち2名は4歳を過ぎての変化であった。学齢までに検査を実施した42名中21名（50%）が最終的には「遅れなし」が確認された。

#### (4) 「遅れなし」群と「追いつき」群の比較

2歳代の間に「遅れなし」が確認された群（7人；表4 A1～A7）（以下「遅れなし」群とする）、2歳または3歳代には「遅れ」「境界」であったが以降に「遅れなし」が確認された群（7人；表4 B1～B7）（以下「追いつき」群）とし、個別に発達特徴をみた。

1歳6ヶ月時に意味のあることばが3語（または4語）以上あるか否かは、いずれの群にもある子どもとない子どもがいた。フォローアップ教室での経過からそれぞれの群を個別にみると、「遅れなし」群は、2歳児健診時に7名中6名が「言われたことは理解している」と養育者は訴えており、3歳児健診時にはA2が「発音が気になる」としていたが他児は「気になることはない」とされた。発達相談時の観察結果からは、いずれも対人関係等の行動上の問題もない表出性のことばの遅れとみなされた。2歳以降の経過を見ると、A1・A3・A4・A5・A6はいずれも2歳代には単語の一部の音節のみで表現する、語頭音が抜ける、音が変化するなどの共通した発話特徴を示し、3歳代になると単語らしい発音になるが、多音節語や連音のリピートが困難などの問題を残しながら改善していった。全体に年齢に比して発話の明瞭度が低く、A2は学齢前に構音指導が必要と判断されこれを受けた。A3は対人関係が若干希薄でマイペースな傾向のある男児で、2歳6ヶ月に2語文の使用が始まり、表出に特別な困難さは示さずに追いついていった。

「追いつき」群は、2歳代には全般的な発達の遅れがあり、成長に伴って遅れが減少したタイプ（B1・B3・B4）と、全般的な遅れはなく、発達に特徴的な傾向があるタイプ（B2・B5・B6）とが含まれていた。前者のB3とB4では、ともに粗大運動発達の遅れがみられ、B4は協調運動の遅れが目立った。3歳児健診時には、B1・B2・B3は「ことばがはっきりしない、発音がはっきりしない」と気にしており、B4・B5は「ことばが遅い」ことを気にしていた。またB6・B7はことばではなく「多動」を気にしていた。「追いつき」群は、いずれも2歳代には言語の理解と表出面とに差が少なく両面の遅れがみられたが、B4とB5では理解が伸びてきた後に「遅れなし」群と同様の表出性の音韻障害がみられ、B4は学齢期に発音不明瞭で構音指導を必要とした。B5は運動面の遅れはみられなかったが、理解に比べ初語が2歳8ヶ月と遅れ、3歳代になっても単語の音韻が変化したり、リピートの困難さが目立った。他の「追いつき」群には表出性の音韻障害や発話の明瞭度の低さは見られなかった。行動面ではB2・B5・B7は、いずれも3歳代にはマイペースな行動が目立ち、人よりもモノに興味強い傾向がみられた。B2とB7は、早い



時期から文字や数字への強い興味が見られた。B 2は3歳、4歳代には言われたことの意味がとくに困難でオウム返しが続く、会話が成立しない時期を経て5～6歳代に言語理解が伸びた。B 7はB 2のような特異的な困難さは示さず、3歳代に理解、表出ともに伸び、4歳代に入って行動の落ち着きもみられた。B 6は2歳代は人とのかかわりが少なくこだわりがあり、自閉的傾向を示していた。3歳代になり非言語性の課題への集中が高まり、ことばによるコミュニケーションが増加し、自分のペースで人とのことばによるやりとりを楽しむようになったがマイペースさは残り、ことばによるやりとりでは相手が合わせる必要があった。

#### (5) 就学指導の結果

就学指導委員会による就学指導では、就学期を迎えた42人中5人が養護学校（知的）、3人が知的障害特殊学級または情緒障害特殊学級が適当と判断され、残りの34人（81%）は就学指導はなされなかった。指導のあった8人のうち7人はいずれも「遅れ」の群に入っていたが、発達検査で「遅れ」があり学齢になったうち転出した1名を除く後の2名は「指導なし」であった。「境界」であり学齢になった4名も「指導なし」であった。また、学齢になった42名のうち4名が、「遅れ」はなくなっていたが学齢近くなって構音不明瞭が指摘され、言語指導を受けた。

## 4 考察

### (1) 2歳で「2語文がない」子どもの状態

#### ①男女比

本調査結果では2歳で2語文がない子どもの79%が男児で、男児が多かった。本調査は「2語文がない」子どもをだけを対象としているが、Rescolaの「語連鎖がない、または50語以下」の基準による男児78%という結果（Rescolaら, 2001）と類似していた。本調査では、2歳で2語文がない子どもの65%は表出語彙が10語以下であることが示されており、2歳で語連鎖がない対象児と、50語がない対象児とは重なりが大きい可能性がある。2歳時点でのこれらの基準では、日本語においても男児の比率が高いことが確認された。

#### ②2歳までの発達状況

2歳で2語文を使用していない子どもの1歳6ヶ月児健診時のことばの状況をみると、約半数は3つ以上の意味のあることばをもつと回答されており、この段階での3語程度のことばの有無は後の経過との明確な関連がみられなかった。また、指さしとの関連では、1歳6ヶ月では約半数が指さしの使用がなかったが、2歳になると大多数が指さしを使用していた。さらに、2歳で2語文のない子どもでは有意味語が10以上ある子どもは35%と少なかった。これらの結果から、2歳で2語文が使用されていない子どもでは2歳までに語彙数も増えていない子どもが少なくないこと、また半数弱では指さしの開始も遅れることが示唆された。

#### ③2歳以降の経過

3歳になると約3分の1の養育者はすでにことばの遅れを気にしておらず、「追いついた」と考え



ていた。残りの3分の2の養育者の約4割は発音の遅れをあげ、全体の約4割が言語発達の遅れを、2割弱が多動など行動上の問題を感じていた。

3歳で特別な対応が必要と養育者に感じさせない群は、2歳段階で言語理解の遅れがあまりなく一般的な発達の遅れもない子どもで、「遅れなし」群の5名のような言語の音韻論レベルでの遅れが想定される子どもが多かった。2歳を過ぎても単語の一部の音のみを用いたり他の音に置換したりし、語音のリピートが困難等の傾向を示しており、2歳～3歳にかけてこれらの傾向は改善したがA2のように学齢まで構音の未熟さを残す場合があった。3歳で発音の遅れが「気になる」とされた子どもも同様の傾向が見られたが、一部には微細運動、協調運動の遅れが観察された子どもも含まれた。

発達検査で「遅れ」と判断され、一般的な発達の遅れが見られた子どもでは、一部は3歳までに急に発達全般が追いついていったが、3歳を越えて発達検査等で「遅れ」と判断された場合には、一般的な発達の遅れかそれに自閉等の他の特性を併せ持ち、「遅れ」の状態が学齢まで継続する傾向が高かった。

一方、2歳代では「遅れ」であっても発達全般の遅れではなく発達にアンバランスがみられる子どもでは、言語の理解面にも遅れを示す場合が多く、マイペースで人よりもモノに興味が向く子どもがその多くを占めた。さらに、明らかに自閉的傾向をもちながら幼児期に言語使用が伸びるアスペルガータイプが示唆される場合があった。このタイプは2歳代にマイペースな行動が強く、人よりもモノに関心を向け、言語理解も遅れる。応答性が低く一時期オウム返しが見られる子どもが多く、3歳を過ぎてから言語理解が伸び始め、表出言語や社会性も合わせて伸びる傾向がみられていた。

このように、「2歳で2語文がない」子どもで幼児期に追いついてくる子どもには、一般的な発達の遅れがなく表出性の音韻面での遅れを特徴とする群と、マイペースな傾向がみられ応答性が低く発達水準に比べ言語理解の遅れを特徴とする群、運動面など発達の遅れを伴い言語の理解面も遅れるが早期にともに追いついてくる群とがあり、いずれの群にも構音の遅れが継続する事例がみられていた。マイペースな傾向を示す群の言語理解の遅れが追いついてくる時期は、子どもにより差があった。

## (2) 2歳で「2語文がない」状態と特異的言語障害との関連

特異的言語障害は同質の集団ではなく、言語発達にかかわるいくつかの異なった障害をもつ群の集合体であると考えられている（Bishop, 1997他）。どのような群に分かれるかについては一定の結論に至っていないが、大きく言語の表出面に障害がある場合と受容・表出の両面に障害がある場合とに区分されることは一般的に認められている。本調査の対象である2歳で「2語文がない」子どもで、発達検査等で「遅れなし」が確認された子どもにも、表出性に限定された遅れを示す群と理解と表現ともに遅れを示す群との存在が示唆された。

表出性の言語発達の遅れを示す子どもは、2歳で2語文がない、表出語彙が少ないなどの状態であっても3歳前後までの伸びが大きく、早期に「追いついた」と認識される群を構成していた。この群は早期に発話の改善が見られたが、経過からは言語発達の遅れの背景には音韻的側面の発達の

遅れが存在すると予想され、英語圏で特異的言語障害の子どものひとつのタイプとして指摘される音韻プログラミング困難 (Conti-Ramsden, Crutchley, and Botting, 1997), あるいはスピーチプログラミング困難 (Rapin, 1996) との類似性が示唆される。本調査では、発達検査だけを指標とし、言語検査を実施していないためこれらの子どもがもつと予想される困難さを明らかにすることはできなかったが、ことばの遅れの一群は発話のために音韻をプログラムする過程に弱さをもつ可能性を示唆した。

また、これらのタイプの子どもの一部には協調運動の遅れが見られ、構音不明瞭が残った場合があった。Conti-Ramsden and Botting (1999) によるフォローアップ研究では、音韻プログラミングあるいは音韻-統語タイプと判定された子どもの一部は後に発語不全 (verbal dyspraxia) タイプに変化しており、表出性の音韻面に困難さを示すタイプには、発話運動面の困難さを併せ持つ子どもが含まれているものと予想され、協調運動、発話運動の遅れの有無もその後のことばの発達にかかわるものと考えられた。

一方、言語の理解と表出とに遅れを示す子どもでは、2歳台で発達指数上遅れが無くなる子どもは少なく、ことばの伸びる時期がより遅い傾向がみられた。全般的な発達の遅れがあり遅れて追いついてくる「発達の遅れ」タイプを除くと、いずれも自閉的とはいえないまでも対人コミュニケーションの希薄さ、マイペースさが見られていた。幼児期を通してこの傾向は目立たなくなるが、ことばの遅れの一部は「言語理解の遅れ」と「マイペースさ」を併せ持った一群で構成されており、これらの群と Rapin ら (1987) が semantic-pragmatic deficit syndrome, Bishop (1997) は pragmatic disorder といっている社会的相互作用の障害を併せ持つSLIの一群との連続性が示唆される。小枝・冨田・竹下 (1990) は3歳児健診で行動異常を伴った言語発達遅滞児は学齢での予後不良となる可能性があるかと警告しているが、本調査結果でもこれらの子どもの言語理解面が伸びる時期は個体差が大きく、これらの子どもが将来学習や社会適応に特別な困難さをもつことがないか長期的なフォローアップ研究が必要である。

### (3) 今後の課題

2歳で語連鎖が見られない子どもを対象として、幼児期の経過をまとめた。本研究は臨床の場での資料に基づいたため、健診を実施した時期により調査項目が一定でなく、対象により発達検査の種類や実施時期が異なるなど不揃いなデータに基づいたものであった。そのため、本来必要と考えられる個別の発達経過に基づいた分析には至らず、対象児の横断的分析にとどまった。また、詳細な言語検査を実施していないため、言語発達の状況については臨床的観察に基づく推定であり、仮説の提起にとどまった。今後は、今回得られた資料をもとに、仮説に立脚し、構造化された状況を設定して学齢までのフォローアップ研究を行い、「ことばの遅れ」の予後についての情報を収集していくことが必要と考えられた。

(やまね・りつこ 社会福祉学科)

(きんの・くるみ 石岡市役所)

文献

- 1) Bishop, D. V. M. (1997) Uncommon understanding: Development and disorders of language comprehension in children. Psychology Press.
- 2) Conti-Ramsden, G., Crutchley, A., and Botting, N. (1997) The expert to which psychometric tests differentiate subgroups of children with SLI. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 40, 765-777.
- 3) Conti-Ramsden, G. and Botting, N. (1999) Classification of children with specific language impairment: Longitudinal considerations. *Journal of Speech, Language and Hearing Research*, 42, 1195-1204.
- 4) 小枝達也・富田豊・竹下研三（1990）3歳児健診で言語発達遅滞と診断された児の学童期における言語能力について，*脳と発達*，22，235-240.
- 5) Rapin I. (1996) Practitioner Review: Developmental language disorders: A clinical update. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 37, 643-655.
- 6) Stothard, S. E., Snowling, M. J., Bishop, D. V. M., Chipchase, B. Band., and Kaplan, C. A. (1998) Language-impaired preschoolers: A follow-up into adolescence. *Journal of Speech, Language and Hearing Research*, 41, 407-418.

## Follow-up study of two-year-old children without word combination

Ritsuko Yamane, Kurumi Kinno

The purpose of this study was to collect data about the language developmental process of children who didn't use any word combination at 24 months. After analyzing the screening data of 66 children without word combination at 24 months, half of them didn't possess a vocabulary of more than 3 words at 18 months, and 66% of their mothers thought that their children's language was delayed at 36 months. Only 48% of these children used pointing gestures at 18 months, but 92% of these children used them at 24 months. Concerning the general developmental level, 64% of these children came in normal or border line by 48 months.

From the observation of their developmental processes, two typical developmental groups were found among these children. One group had no general developmental retardation by 24 months and the other group overcame their developmental retardation by school age. It is suggested that the former group members would have difficulty concerning phonological processes, and many of the latter group would have difficulty not only with language comprehension but also with social interaction. Further long term studies are needed to gether more precise data. This data will make clear the effects of early language delay.

Key Word: late talker, follow-up, screening